

佐賀大学・特定プロジェクト（地域デザイン特別演習 + 建築環境デザイン特別演習Ⅱ）

●商工会議所・佐賀銀行跡地活用提案

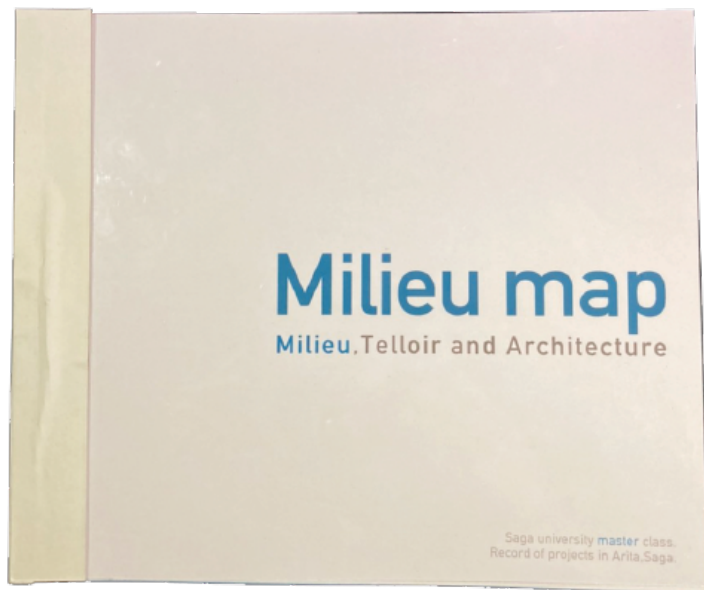
1. フィールド・サーベイ（『記憶の中のARITA PJ』）
2. プレ・デザイン（設計要件提案）
3. 具体的なデザイン提案



第4回有田内山グランドデザイン検討委員会
佐賀大学理工学部建築環境デザインコース・宮原真美子

ARITA scenario 2040 - Milieu, Terroir, and Architecture -

①. うちやま地区でのフィールド・サーベイ



■ 専門家へのインタビュー風景

専門家へのインタビュー

- ・ NPO灯す屋 佐々木氏
- ・ アルセット建築事務所 清水氏
- ・ 有田町文化財課 旗島氏

住民へのインタビュー

- ・ 35軒



■ 地元住民へのインタビュー風景

②. プレ・デザイン

建築的課題に対する企画力

実現すべき将来像が不確実な時代に、何を建てるのか、どのように整備・運営されるのかという設計要件の整理にこそ、創造性が求められる

地域デザイン特別演習・建築環境デザイン特別演習Ⅱ ジョイント演習, 2020
令和2年度戦略的に支援する特定プロジェクト (有田)

2020年11月13日 (金)
16:30~18:00
香蘭社赤繪町工房
(佐賀県西松浦郡有田町幸平 2-3-2)

有田陶磁美術館

これらの公共建築を考える
- プレデザインの思想から -

小野田泰明氏

東北大学大学院教授, 建築計画者

1963年金沢市生まれ. 1986年東北大学工学部建築学科卒業. 1998~99年カリフォルニア大学建築都市デザイン学科客員研究員. 2007年より現職. 現在, 建築学会建築計画委員会副委員長, 仙台メディアテーク運営協議会委員長.

■建築計画に参画した代表的な作品 | せんだいメディアテーク, 横須賀美術館
■計画・共同設計の作品 | 荒井市営住宅, くまもとアートポリス・苓北町ホール, 丘の家, 10-BOX, 伊那東小学校

主催: 佐賀大学理工学部建築環境デザインコース / 共催: 理工学部コミュニティデザイン研究会 / 問い合わせ先: myhr@cc.saga-u.ac.jp (宮原真美子)



＜演習をする上でのスタンス＞

■都市・まちのアイデンティティ

- 我々がある社会空間において生起する＜出来事＞を、他の社会空間において生起するものと異質なるものとして経験することによって立ち現れる（ミッシェル・ド・セルトー）

■都市・まちに対する眼差しの複数性

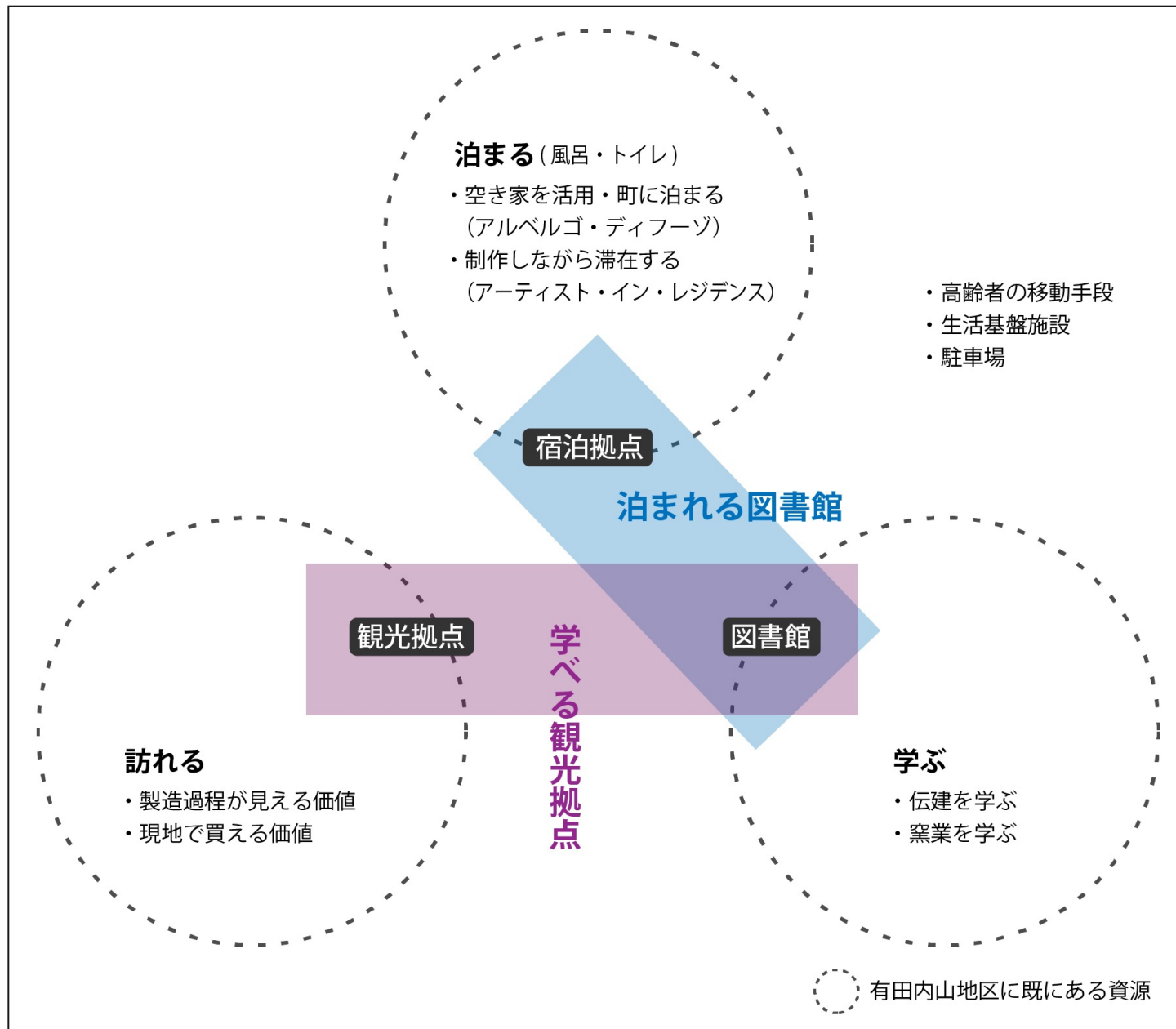
- 神の視点：都市を眺めるような視点, 都市計画的視座
- 路上の視点：人々の日常的実践によって浮かび上がってくる都市像, 「いま・ここ」の経験
- メディアを媒介とした視点：メディアが伝達するイメージの集積, 「いつでも・どこでも」

■＜出来事＞の経験の仕方の変容

- 既存の資源を活用した新しい＜出来事＞の経験を生起させる建物の提案

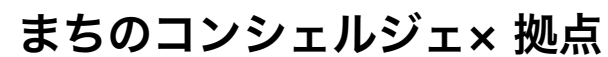
ARITA scenario 2040 - Milieu, Terroir, and Architecture -

②. プレ・デザイン（何を建てるのか、要件設定）



< 学べる観光拠点 / 泊まれる図書館のコンセプト >

③. 具体的なデザイン提案（5グループ） | 泊まれる図書館、学べる観光拠点



ARITA scenario 2040 - Milieu, Terroir, and Architecture -

③. 具体的なデザイン提案 (i) : 泊まれる図書館 | GRAFT on UCHIYAMA (既存の銀行活用×アルベルゴ・デフーズ)



ARITA scenario 2040 - Milieu, Terroir, and Architecture -

③. 具体的なデザイン提案 (i) : 泊まれる図書館 | GRAFT on UCHIYAMA

既存の銀行活用

× アルベルゴ・デフーズ

1F : レストラン

(観光 + 宿泊対応)

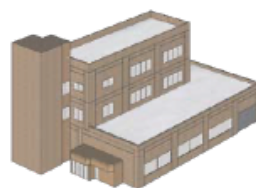
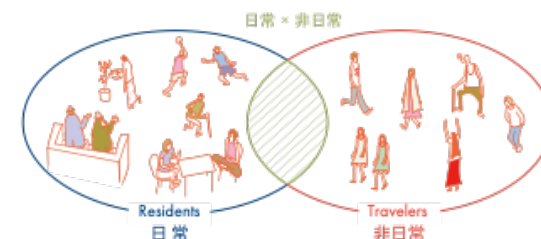
2F + チューブ : 図書館

(観光客 + 住民)

3F : 宿泊施設の拠点

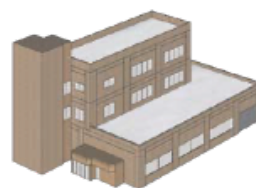
03 日常と非日常の交差点

銀行としての役割を担っていた既存建物に内山地区の住民の日常利用の機能である図書館、カフェ、レストランと観光客の非日常利用の機能であるギャラリー、UCHIYAMA HOTEL レセプション・浴場、ランドリーの両方を兼ね備えさせる。日常と非日常が「交差」することによって、まちの中心にかつての賑わいを取り戻し、内山地区を活性化させる。



佐賀銀行有田支店

長い間有田のまちを見守り、
地域の人に親しまれてきた銀行



複合施設 + 図書館

既存躯体に本棚のチューブを貫入
させる



Graft on UCHIYAMA

本棚が立ち並ぶチューブを
巡る地域拠点の提案

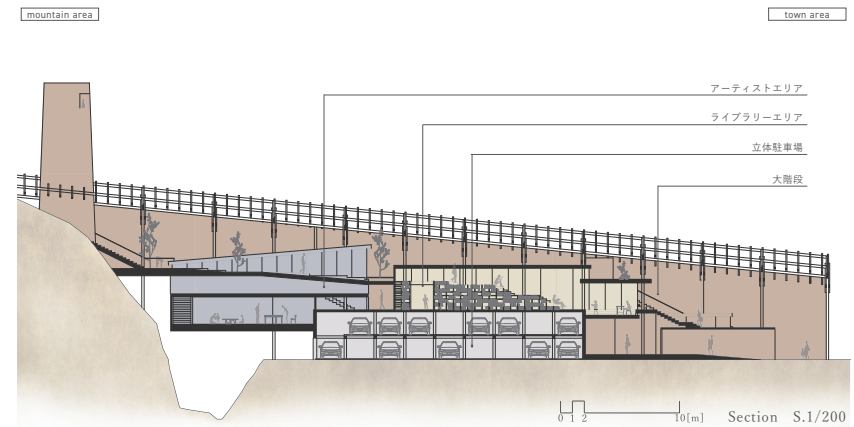
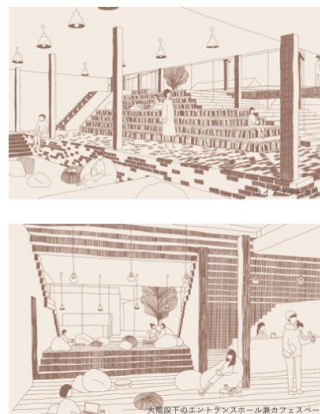
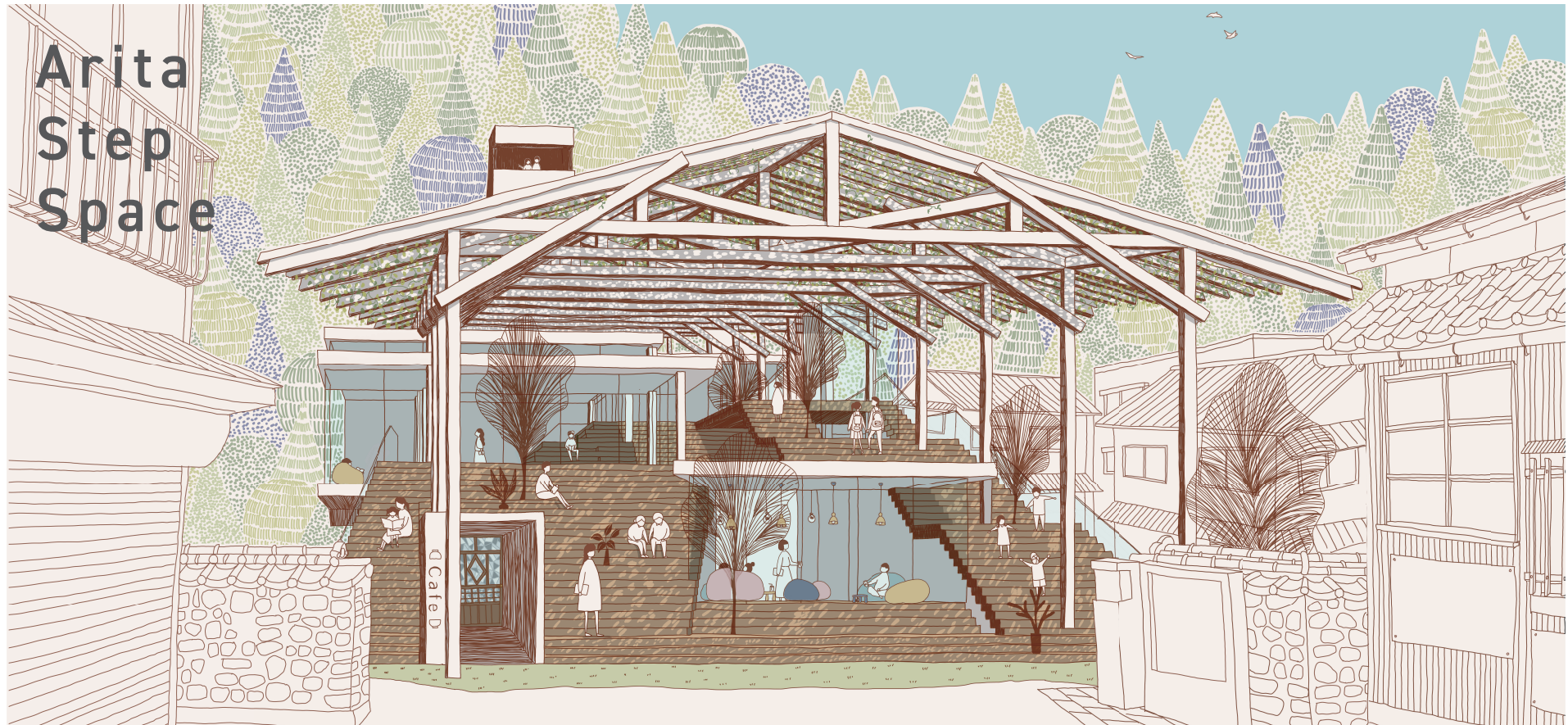
05 UCHIYAMA HOTEL

内山地区の民家を宿泊施設として活用する。対象地から 200m 以内の民家 8 棟を改修し、1 組につき 1 棟を貸し出す。活用される建物は伝統的建造物に指定されているもののうち、先のヒアリングの結果で現在空き家と分かったもの及び将来的に空き家になる可能性が高い物件がある。図書館内にこれらのレセプションがある他、浴場やランドリーといった機能も集約する。



ARITA scenario 2040 - Milieu, Terroir, and Architecture -

③具体的なデザイン提案(ii)：泊まれる図書館 | Arita Step Space（駐車場×アーティスト・イン・レジデンス）



ARITA scenario 2040 - Milieu, Terroir, and Architecture -

③具体的なデザイン提案(ii): 泊まれる図書館 | Arita Step Space

立体駐車場

×アーティスト・イン・レジデンス

1F: 駐車場

2F: アーティスト・イン・レジデンス
(窯業大学校卒業生, アーティスト)

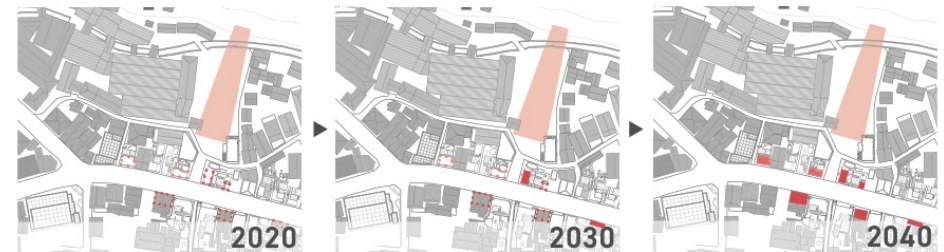
2+3F: 図書館

4F: テラス
(マルシェ、観光の休憩所)

03

新しい文化を取り入れる START UP の場

タイトルの STEP の意味として、一つは大階段であり訪れた人に「階段 (STEP)」に滞在してもらおうという狙いがある。一方で二つ目の意味は、若手アーティストの新しい文化・産業が成長 (STEP) していくことを指す。有田町に来た若手アーティストは、この施設で交流を深めながらまちのことを知り、自分の作品を成長させていく。数年間この施設で経験を積んだ彼らは使われていない店舗へ移って、表通りの空き店舗で自分の生業をさらに成長させていく。有田で少しずつ成長させた文化、産業はやがて有田の新しい伝統として根付き、有田文化の一部となる。そして、今度は彼らが次の若手アーティストを支援する立場になる。



02

まちのハブとなる図書館

図書館は、最も多くの利用がある公共施設のひとつだと言われている。多くの人々で賑わう図書館には、様々な種類の書籍や資料等が所蔵されているが、特に郷土関係の資料は群を抜いて充実している。言い換えると図書館は、地域の知的遺産の宝庫だと言える。昨今、旅行者の中には、旅先の歴史や伝統をより深く知りたい、地域の人とふれあいたい、という人も増えている。このような図書館の特性を踏まえながら、この図書館には本を寄贈する仕組みを設けている。この目的は、地域住民は郷土資料等を提供し、訪れた観光客は自身の趣味の本などを寄贈することで、有田のことを中心としながらも、他の様々なジャンルを兼ね備えた図書を形成することである。その結果、多種多様な人たちとの交流が期待できることに加え、そこに滞在する若手アーティストの作品の資料としても役立つ。住民や観光客、アーティストが集まるまちの中心地として機能する図書館となる。



04

構造のコアとなる立体駐車場

現状として、有田のまちが抱える問題の一つに駐車場の数が少ないということが挙げられる。これは現地調査の際のヒアリングでも明らかとなり、多くの住民が問題視している。しかしながら、新たに駐車場のスペースを確保することもまた困難であるため、本提案では、構造体の中心核として大階段の真下に立体駐車場を配置した。この場所に立体駐車場を配置することで、立体駐車場を支える構造体は真上にある大階段を支える構造体にもなり、さらに丈夫なレンガ造りで形成されているため、構造体のコアともいえる。また、通常ではアクセスしにくく、かつ光の届きにくい地上奥側のスペースも、駐車場にすることによって有効的に空間を活用し、人の流れを上の大階段へ促すことができる。立体駐車場というネガティブなもの上手く計画として取り込むことで、この建物が有田の新たな玄関口となりつつ有田の大きな問題の一つを解決する施設となる。

ARITA scenario 2040 - Milieu, Terroir, and Architecture -

③.具体的なデザイン提案(iii)：学べる観光拠点 | 出会いを包む傘

まちのコンシェルジュ (文化との出会い)

1F：観光拠点

1+2F：図書館

テラス+タワー
：観光の休憩所



大屋根で包まれた大空間 人々 / 文化と出会う交流拠点

H

5

道の空間と連続し、町を行く人々や地域の文化との「出会い」を作る地域文化交流拠点としての建築を提案します。この施設は観光案内所 / カフェスペース / 図書エリア / ギャラリーなど多様な機能を傘のような大きな屋根で包むことで、一つの大きな空間の中に人々の雑多なアクティビティ（活動）を促し、それらが混ざり合うような計画を意図しています。空間を機能で分断せず、おおらかな大空間とすることで、人々や活動が「出会い」、新たな関係を築きながら更新されていくような空間を目指しました。

